寿岳文章の和紙研究

中　島　俊　郎

1 「20世紀の和紙
―寿岳文学 人と仕事」

2021年10月16日，国際シンポジウム「20世紀の和紙―寿岳文章　人と仕事―」（図版１）がズームによって世界配信され発表と活発な討議がなされた。主たる発表者とテーマは，発表順に中島俊郎「寿岳文章の生涯と和紙研究」，キャスリーン・A・ベイカー「ダード・ハンターの功績について」，山仲進「寿岳文章収集和紙の資料的価値」，クレア・クッチオ「文化の側面から見た南アジアの手漉紙」，リン・シュアーズ「アートにおける手漉紙，その近年の動向」であり，各人の発表終了後，意見交換と総括がなされた。司会は京都大学大学院教育学研究科教授，佐野真由子がつとめ，350名以上の方々が参加した[1]。私の発表は寿岳文章の生涯と文化的活動，とくに和紙研究の意義を説いたものであった。ただ割り当てられた発表時間が30分弱という短いものであり，また寿岳の人なりを紹介する必要があり，必然的に概説的にならざるをえなかった。発表のために用意した草稿は和紙の文化的意義を解説し，調査・保存に挺身する寿岳の姿をその時代のなかで描こう意図していた。だが，時間の制約上，やむなく割愛せざるを得ない部分が大幅に生じてしまった。そこで本稿ではシンポジウムのときに言及，引用できなかった寿岳の和紙研究の一端を補足してより包括的な全体像を提示しておきたい。具体的に言えば，寿岳が和紙研究をはじめる契機となった書誌学との関係，手漉紙の世界的な研究者であり実践者であったダード・ハンターとの交渉，さらに『紙漉村旅日記』の意義などをより深く本稿では分析，解明しておきたい。

はじめに

寿岳文章（1900-92）は偉大な学匠で，諸領域を横断する学際的な存在であった。晩年，自らが追究してきた仕事を総括しつつ，「一つは，英文学を主軸とする外国文学の研究と翻訳，次の一つは，書物の美的ならびに社会的機能の究明。残る一つは，愛着からくる和紙への学問的な取り組みで，和紙学とでも名づくべきか」と三分野に分類している。ダンテ『神曲』の訳業は第一の分野における大きな文学的業績であるが，「文学は，私にとって，思考や研究とだけに結びつくものではない。人生のほかのもろもろの事象と同様，行じてこそ意義をもつ」[2] という言葉にうかがえるように，いずれの分野にせよ，机上の学問ではなかった。第二と第三の分野は密接に結びつき重なっているのだが，今日でも国際的に高い声望をもつ向日庵本の制作，戦時中に全国にわたり行われた紙漉の現地調査，正倉院における和紙の検証作業に到るまで，まさに「行じてこそ意義をもつ」実践の連続であった。真言宗の寺，性海寺の塔頭，龍華院（神戸市垂水区）に生まれた仏教徒であったが，世界の宗教を把握し宗教的真理を追究した人でもあった。まず寿岳の和紙に関する業績を一瞥しておきたい。ただ先に言及したように，寿岳の和紙研究を理解するには専門的な知識だけではとうてい及ばない。学際的な知見が要請されるからである。

寿岳が和紙研究を志すようになったのは自らも述べているように書誌学的な探究心にかられた結果であった。京都大学に在籍していた頃，寿岳はロナルド・マケロウの名著『文学研究者のための書誌学入門』（*An Introduction to Bibliography for Literary Students*, Oxford Univ. Pr., 1927）を読み，雷にうたれたような衝撃を覚えた。そこには文学作品の本文テキストを決定するためには，一見無関係とも思われる印刷機構の細部なども深く関係することが説かれていて，文献研究には出版に至るまでの精密な考究が必要であるのを

知った[3]。また「漉入れ」（ウォーターマーク）の重要性が説かれていたため，西洋の手漉紙の実物見本を収集しはじめるところとなった。書物の材料である紙について寿岳は，異なる視点から「（和紙の研究は）書誌学からきた。私の場合書誌学は，科学としての学問のほかに，書物の工芸的な美しさも入るのです。ですから，書物が好きでいろいろやっているうちに書物のいちばん大切な材料の紙にぶつかったのです」[4] と自らも語っている。

寿岳文章が和紙の分野で貢献したのは，和紙の価値を検証し，和紙文化史を追究し，和紙の保存運動に寄与したという三つの大きな業績に収斂できよう。

日本人の生活のすみずみまで浸透していた和紙を「用と美」という価値観において説いたのは寿岳を嚆矢とする。明治末期に入ってきた洋紙生産によって手漉和紙の需要は著しく減少していた。木材パルプを混入し，薬品で漂白された「改良紙」が従来あった和紙を一掃してしまった。改良紙が日本国中を席巻しようとしているとき，寿岳は本来の材質を用いた，つまり素材をありのままに生かした和紙の「用と美」を唱えたのである。

薄い和紙であっても幾重に何度も折りたたもうが切れることなく，また水に濡れても破けない強靭さがある。和紙の「横紙破り」という言葉はこうした強さから派生した。加えて和紙には清浄さ，清楚な美しさがある。このような「用と美」を兼ねそなえた和紙がもつ価値を寿岳は誰よりも重視し，自らの美意識の理想を体現したものと考えたのである。強いコウゾに苦難を耐える男性の雄勁さ，肌理が細かく光沢のあるガンピ，ミツマタに女性の美徳，心の細かさを見ると寿岳が人格化しているのはいかにも文学者らしい[5]。

和紙の歴史，文化論に関する寿岳の業績は広大で深遠である。『和紙風土記』（1941），『日本の紙』（1967），『正倉院の紙』（1970）などの一連の論考は，すでに和紙論ばかりか文化論としても古典になっている（ただ，英文で書かれた論考については稿を改めて論じてみたい）。こうした成果は寿岳の独力でなされたものではなく，新村出たちを会員とした「和紙研究会」（1939年設立）などの研鑽があって初めて結実したものであった。寿岳は和紙研究会で異分野から参画する共同研究の必要性を痛感していた。たとえば日本独自の「流漉き」を解明するのに，「つなぎ」の成分であるトロロアオイ，ノリウツギの粘性を解明するには，高分子化学の知見が不可欠であったからである。後年の正倉院の紙調査も和紙研究会が母体となって初めて可能となったのである。1960（昭和35）年から３年間にわたり実施された正倉院の紙調査もまた，実証研究がいかに重要であるかと再認識させる場となり，寿岳の「日本の紙への知見は著しく広められ，また深められた」という。そしてここで忘れてはならないのは，こうした和紙研究に着手した人々は，他に専門をもつ在野の研究者であったという事実である。和紙試験場，製造会社，官立の機関などではなく，民間人（アマチュア）の手によって緻密な和紙研究が進められたことは注目してもよい。寿岳の居宅「向日庵」には膨大な和紙見本が保存されていた。全国の紙産地から寄贈された和紙に加えて，寿岳自らが収集した和紙があった[6]。和紙の保存運動を展開するうえで紙漉の実態を調査するところから寿岳のリサーチは始まった。日中戦争が泥沼化し戦死者が急増し農村が疲弊していくなか残存していた紙漉村を訪ね，紙漉の実態を書きとどめた。それが名著『紙漉村旅日記』（1943）である。

Ⅰ　書誌学から和紙研究へ

上述したように，寿岳が和紙の研究を志すようになったのは書誌学的な探究心にかられた結果であった。京都大学に在籍していた頃，寿岳が『文学研究者のための書誌学入門』に学問的な衝撃を覚えたのは，不安定なテキストによるウィリアム・ブレイク研究の本文校訂が進行中であったという状況も考慮しておかねばならない[7]。

また寿岳は柳宗悦と共同編集で『ブレイクとホキットマン』（1931-32）を月刊で出すことになり，本文を調達するため，雪の五箇（福井県今立町大滝を中心とする五部落）を訪ね，理想としていたオランダの手漉紙を模造してもらうことになった。ところが目の前にある手漉和紙の方がはるかに上質に思えたのであった。

結果として『文学研究者のための書誌学入門』は「私の学問の方法論的基礎」を与え，読後，寿岳は「全く新しい未知の学問的領域へ乗り出したようなさわやかさを覚えた」という。またマケロウ（1872-1940）は研究書だけにはとどまらず，英国書誌学会への入会に際しても助力してくれたのである。寿岳は1932（昭和７）年から英国書誌学会の会員になるのだが，入会に際して数々の便宜をはかり，推薦してくれたのは，他ならないR・B・マケロウ自身であった。寿岳はマケロウに手紙を書いて英国書誌学会の会員にしてもらえないかと懇願した。会員の推薦がないと入会できず，その資格を得るには相当な書誌学的業績が

必要であったからである[8]。1931（昭和６）年10月30日付の寿岳に宛てたマケロウ書簡には入会のための諸条件を述べ，寿岳の入会を歓迎する旨が記されている[9]。マケロウは未知白面の若者の熱望を受け容れてくれ，寿岳は日本を代表する唯一の会員に晴れてなることができたのであった。1940（昭和15）年１月20日，マケロウは逝去したが，寿岳は，「私の心の中には博士の姿が常に宿っている。私はあくまでも博士の衣鉢をついで，この国ではほとんど行く人もない書誌学の細くてせまい道を，よしや独りなりとも分け入ろうと思う[10]」と追憶の想いを新たにした。

市河三喜，細江逸記などの英文法研究書によって与えられた研究の科学性を寿岳は書誌学によってさらに補完していった。そうしたとき言及した『文学研究者のための書誌学』との遭遇があった。本書はすでに1927年に初版が出ていたが，訂正がほどこされた再版（1928年版）を入手し，耽読するところとなった。1930年７月13日に読了し，巻末に英語で，「これよりも魅惑的な本に出会った経験は一度もない。書誌学への私の興味は，このみごとな本によって，消すべくもなく燃え立たせられた」[11] と興奮して記している。だから「事実，この本との出会いが，書物への私の愛と理解を決定的なものとした」という言葉は何も旧懐の念にふけているのではないのである[12]。

寿岳は書誌学を自ら規定しているように，「物質的形態として見た書物に外在もしくは内在する，種々の現象を博物学的な観察によって整理し，著者の意図をそのもっとも正しい姿においてとらえようとする一箇の科学である」（『平凡社大百科事典』［1955年版］）と理解していた。そして寿岳には科学として書誌学をとらえる一方，書物を工芸作品とみる美意識があった[13]。ここに寿岳独自の「用と美」の主体性がうかがえる。つまり，それは科学性の追究のなかにも美意識も雁行させていきたいという人間の主体性を視座にしたものであった。そうした視点から見れば『紙漉村旅日記』が紙漉の記録をとどめた和紙文化史だけではなく，そこに登場する人々が脈々と息づき生活している探訪記録，または文学作品とも読めるゆえんである。

健全な美　寿岳が紙漉調査のため全国を行脚する前年に発表された「美について語る」は，寿岳の文化活動をつらぬく姿勢が明示されている重要な論考である。冒頭，「美が，人間の生活のどんな小さな隅々にまで行き渡っているのが真実である以上，すべての人が美について考えるのが本当であろうと思う」という寿岳が常々抱いている信条が吐露される。寿岳によれば，美は「ヘア・ピンのように小さい物から，大建築物に至るまで」[14] 宿り，議論の対象となるものであり，そして「美は貧富貴賤のわかちなく，誰にも自由に己身を現すのです。ここに美の公共性，美の社会性という大きな特質がおのずから生じてまいります」と述べ，美は万人のものであるという考え方を強調する。だから寿岳は，美学者が美を抽象的な対象としてみなしてしまう通弊を避けようとする。なぜならば美学者は「美が人間の生活と関連してもっている大きな社会的意義や道徳的意義を第一に考え」ないからであった。よって寿岳は常識から美を語ってよいのではないか，と提言する。ここで注意しておきたいのは寿岳の美に対する視座である。ある意味では美は享受するものであるが，それ以上に自らが主体となってたえず美に対峙していかねばならないという能動的な寿岳の態度を看過してはなるまい。そして寿岳は「健全な美」を重視し，和紙に対してもこの美意識でもって検証していこうとしたのである[15]。

では，寿岳はかかる美意識をどこでつちかい，いかに展開させていったのであろうか。柳宗悦の提唱した民芸運動の精神に「健全な美」を求めるのは一理あるかもしれない。だが，享受者も美を自らの意志で能動的に対峙していかねばならないとする寿岳の主体的な視座は，尊敬してやまなかった彫刻家で社会批評家エリック・ギル（1882-1940）を介在して，ギルの師であるハーバード大学美学教授，アーナンダ・クーマラスワミ（1877-1947）の考えに立脚している―「芸術家とは，決して特別な人ではなく，実はすべての人間が，みなそれぞれ特別なのだ」[16] という点において。

ルネサンス以後，芸術は人間の実生活と遊離してしまい，日常の用に即さないきわめて抽象的なものが創作されるほど芸術としてすぐれた特性を示すものだという風潮が支配した。ギルはこうした芸術観に異を唱え，「用」から遊離した美などはありえないと主張し，使われないもの，人間の生活に密着していないものは畢竟，芸術ではないとまで断言する。よってわれわれ人間は，どのような人生をおくっていようとも，いかなる職業に従事している者であれ，必ずそれぞれがその分野で芸術家となる，とギルは考えているが，その根源にはクーマラスワミの人間はすべからく芸術家であるという考え方があるのは明瞭であろう[17]。よってクーマラスワミ，とりわけギルから強い影響を受けた寿岳は日常品であり，一方では文化財であり，美術品ともなる和紙を，和紙が放つ「健全な美」をこよなく愛したのである。

Ⅱ　紙漉業の全国調査

寿岳の手漉紙研究を大きく推進させた原動力のひとつにアメリカのダード・ハンターの紙研究がある。寿岳は「和紙と欧米人」と題した一文を『朝日新聞』（1952年11月11日）に寄稿したが，その冒頭でトマス・キース・ティンダルの大著『日本手漉紙』（1952）のためにハンターが寄せた「長い序文」を紹介している。そこでは日本の文化的至宝である経巻，写本，版本などが和紙なくして存在しえなかったこと，北斎，広重の版画芸術の「無比の色調」は和紙なくずば生まれえなかったこと，レンブラントが和紙の愛用家であったことなどの和紙が包摂する文化的重要性をハンターは指摘していた。このようにハンターは和紙の技術論ばかりか広く文化論にまで通じた存在であり，当初より寿岳が紙研究者として理想とする人物でもあった。

ダード・ハンター　1933（昭和８）年，寿岳はすでに研究書から学恩を蒙っていたハンターと会うところとなった。４月３日，寿岳は手漉紙の調査のため来日して京都都ホテルに投宿しているダード・ハンターと中井商店の斡旋で面談することになった。よほどうれしかったのか，午前11時という面会時間まで克明に記録している。話題は自ずとプライベートプレス（私家版）から紙漉業，紙漉技術に到るまで縦横にわたったが，寿岳をもっとも感激させたのはハンターが持参した実物の手漉紙であった。「なんとすばらしい紙！ことにイタリア最古の製紙法を摸して漉いたというやや茶色を帯びた賽の目入り―といっても，日本のように竹ではなく，真鍮でつくるよし―の紙を手にしたとき，かなり多くの手漉の紙をみてきた私ではあるが，あまりの美しさに，しばらくは我を忘れて見とれてしまった。わが国の手漉紙の柔らかさがない代りに，それらの紙にはじつに強い清らかさ，濁りなさ，乾き切った美しさがある」[18] と感嘆をもらし手放しで賞賛している。後年，経験を深めた寿岳はハンターの紙についても全面的には賛同しておらず，しかるべき欠落を指摘している―「ハンターは自分で漉いた紙を私にもくれたりしていますが，それは相当立派な紙はつくるのですよ。しかし，ご承知のように日本は植物の生の繊維からたいてい紙をつくりますけれども，外国でのいい紙といえば，いったん繊維が織物になって，つまりリネンとか麻系統が主なのです。ですからどうしたって繊維が短くなってしまっているから，もろい紙になるんです」[19] と日本の原材料の優位性を強調している。

寿岳はハンターに記念として自らが作製したブレイクの詩を翻刻した詩集を贈呈した。「私がハンター氏に贈った『無染の歌』にしても，氏は非常に喜んでこれを受けてくれたけれども，印刷という点ではまったく恥しいものである。ただ私は，私の持つあらゆる真摯と熱情と正確と良心とをこの書物の製作に注いだ。その心構えだけは原作者であるブレイクの前に立っても，またはハンター氏のような私版刊行者の前に立っても，十分におもてをあげ得ると思う」[20] と技術的な欠陥をあげているが，熱意だけは誰にも負けないと自負している。ハンターに寿岳が進呈したブレイクの『無染（むぜん）の歌』は，ハンターと出会う二ヶ月まえに向日庵本の一冊として，限定115部で出版された。芹澤銈介が型染装布の装幀をほどこし，本文用紙には越前特漉鳥の子が用いられた。

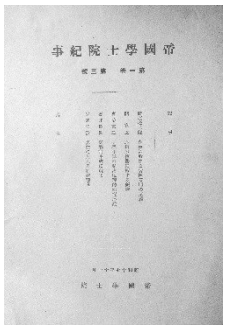
京都での忘れがたい感激をハンターに伝えようとして，早くも３日後，寿岳はハンターに手紙を送っている。朝鮮の教育庁の役人を紹介し，研究書にみられるハンターの誤りを訂正している（ハンター宛，寿岳書簡，1933年４月６日）。そして続いて一ケ月もしないうちに寿岳は再びハンターに手紙を認め，『工藝』の和紙特集号を英語に翻訳する旨を申し出をしている（ハンター宛，寿岳書簡，1933年４月23日）。寿岳とハンターの交渉は私家版の共同制作にまで進んでいた。ハンターは，「私と共著でわが国の手漉紙に関する書物を出版したい希望を言ってきました。日本の手漉紙を使って日本で印刷し，欧米で売ろうと言うのです。ハンターの如き立派な私版刊行家と共同のこの仕事ができれば，ただに私のみならず，日本のためにも大いに慶賀すべきことだと思います。早速私はその提案は自分も望むところである旨を返事しておきました」と計画の端緒を伝えているが，戦争のためにこの希望は実現しなかった[21]。とは言え，ハンターは寿岳の和紙調査を促がした大きな存在と見てよかろう。現にハンターに対して，政府からの援助金で三年間の紙漉調査を実施することを寿岳は手紙で伝えている（ハンター宛，寿岳書簡，1936年９月６日）。

有栖川宮記念学術奨励金　全国をめぐる和紙調査には巨額の費用が必要であった。有栖川宮記念学術奨励金によってそうした経費は賄われた。高松宮殿下から学術振興の目的で下賜される，1937（昭和12）年度の有栖川宮記念奨励金は，吉田増臓（宮内省御用掛）の「皇国古語の研究」と寿岳文章「本邦に現存する手漉紙業の歴史地理的研究」に決定をみた。これは学士院

会員であった新村出の推薦によるものであった。この奨学金は1913（大正２）年に薨去（こうきょ）した有栖川宮威仁親王を記念して1926（大正15）年７月５日に制定された有栖川宮記念学術奨励資金制度をいう。『関西学院新聞』（昭和12年９月２日）には寿岳の直話が記録されている。「今回計らずもこの光栄に浴し感激しております。５日宮家へ伺候いたします時は種々御下問になり洋風のティーを頂きながら殿下，妃殿下よりいろいろお話を賜り学問の名において私のごとき名も無き一下民に与えられたこの光栄は全く殿下の学問に対する深い御心ばせと感激して退出いたしました。殿下の御心にそい奉るよう努力致します」と当日の感激をつつみかくすことなく伝えているが，最後に「なお学生諸君の郷里で紙を漉く家があればお知らせ願いたく一宿のご厚意を与えられれば幸甚です」と学生に早くも協力を訴えているのは，寿岳のいかにも教師らしい一面を示すものとして微笑ましい。高松宮との会談について昭和12年７月５日付の『高松宮日記』には，「1530［午後３時30分］，有栖川宮記念奨学資金の７月分をわたす。昨年より引続きの，吉田氏の古語研究と寿岳氏の紙抄きの研究」[22] とある。なお，当日の様子は『寿岳日記』に詳述されており，『絵本どんきほうて』，『書物』などの向日庵本を献上した旨が記されている。さらに寿岳はハンターなどの持参した外国文献を参照しながら，「外国人でさえ不完全ながらかかる述作あり，日本人たるもの大いに研究すべき」と主張している。

探訪調査は1937（昭和12）年から1940（昭和15）年にかけて行われたが，『紙漉村旅日記』が出版される前年の1942（昭和17）年に発表された調査報告（図版２）は，「手漉和紙の歴史地理的研究序説」と題された論考である。論文の付録として吉野国樔村で特別に漉かれた用紙に印刷された「和紙略年表」が付されているが，これは実物の手漉和紙を示すことで論をさらに強化する実証的な試みでもあった。向日庵版『紙漉村旅日記』（1943）にも実物の和紙が貼付され実証性を深めている。論文「手漉和紙の歴史地理的研究序説」の構成は，「はしがき」「1，和紙研究資料の概観」「2，和紙の歴史地理的研究における一，二の問題（イ）カミの語源，ならびに一，二の紙名について（ロ）溜漉および流漉について」から成り立っている[23]。

ここで寿岳が実践した「手漉紙業の歴史地理的研究」とは具体的にどのようなものであるのかという疑問が生じてくる。報告書は簡潔かつ具体的に示めしている。「実地踏査について言えば，私は，現在もなお紙を漉き続けている国内各地方，或は今は亡びていても嘗ては製紙地として著名であった場所を歴訪し，もし記録や文献の存する場合にはつとめてこれを採録し，古老に質して製紙に関する口碑，伝説のたぐいを求め，工程や技術を詳しく観察し，必要な場合には写真を撮りなどしたのであるが，古記録は多くは散佚して起原を探るに由なく，古老の記憶も明治初年より以前に遡り得る例は稀に，結局幕末以後の製紙の変遷を聞知するだけで満足しなければならぬ場合の方が多かった」[24] とあるように，現地を探訪しリサーチを敢行する「地理的研究」と，古記録，文献を検討し，土地の古老に伝説などを問い質す「歴史研究」を巧みにクロスさせ，つまり紙漉業の「時間」と「空間」を交差させることで時空間において立体的に把握しようとする寿岳の意図が理解されてくるのである。また歴史研究については郷土史家のアプローチにはとかく問題があったが，「たとえ非学問的にもせよ，熱心な郷土史家がその土地の製紙の沿革を整理しているようなこともないではなく，また私自身塋域の古墳を検してその土地の紙祖がいずれの国の人であるかを知り得たこともあった」という。そしてリサーチの成果として，「全旅行を通じて，工芸的な見方よりする和紙の現状調査は十分に行うことができた」という満足感を得ていたのであった。寿岳から調査の進捗を聞いていた柳宗悦は，探訪記録が「一片の報告」ではなく，伝統に立ち「健実な創造」へ進む，「未来に対」する「貴重な示唆」であって欲しいと願った[25]。


帝國學士院紀事

2 『帝国学士院紀事』

後年に寿岳自身がより具体的に総括している言葉を確認しておこう。「帝国学士院の委嘱を受けて私が従事した調査のテーマは，手漉和紙の歴史地理的研究であった。歴史地理的研究とは一体何をさすか，学者の見解は必ずしも定着していないようであるが，私は私なりに，歴史という時間的な流れと，地理という空間的な平面の交差する接点を足場とし，いわば歴史と地理の谷間をくまなく歩いて調べることだと解釈する。そのためには，文献や史料の援用はもちろんのこと，民俗学や考古学の方法論もゆるがせにはできまい。しかし何よりも必要なのは，よく見，よく聴き，よく記録するフィールド・ワークであろう」と指摘しているように，人類学的な調査方法が寿岳の念頭にはあった。

そしてこの成果のひとつとして，「和紙抄造技術の二つの頂点の溜漉・流漉が，東北のある地方で，それぞれ「ゆりどめ」「くみなげ」という，そのものずばりの名で呼ばれているのを知った時の，私たちの喜びは大きかった。誰から教えられたのでもなく，農民の暮らしの知恵が，このたくみな表現を生みだしたのだ。現地へ行ってみなかったら，おそらく私たちはこの方言を知らずに終ったことだろう」[26] と述べ，現地調査の重要性を再確認している。

現地調査の成否は事前準備の調整にかかっていた。寿岳はまず農林省農務局発行の『副業参考資料第31号』（昭和３年６月）のなかに所収された『手漉製紙ニ関スル調査』を精査し，現存する紙漉村をまず選定し探訪地を同定することにした。そうした作業のなかで，内閣統計局労働課長である水谷良一（1901-59）からの多大な尽力があった。水谷は民芸の会員であり機関誌『工藝』誌上で多くの民芸に関する論考を発表していたが，寿岳夫妻への支援も惜しまなかった。まず，寿岳は主要な手漉紙業地がある町村へ数百通の協力依頼の手紙をしたため，そこの村長，組合長から紙漉きの現状を知らせてもらうように依頼をした。だが，「もう紙を漉いていない」という返事が多々あった。すでに副業としての製紙は衰退しつつあったのだ。寿岳のなかで調査を一刻も早く着手しなければならないあせりと苛立ちが募ってきた。そこで陸地測量部の五万分の一の地形図で所在地を確認し，目的地に関する旅行案内を参照し，日程を定めていく。紙漉きは農閑期の副業であり，晩秋から早春への冬場に行われるのが一般的で調査期間も限定されていた。日本全国をいくつかのブロックに分け，寿岳の原案を二，三ヶ月前に水谷統計課長を通じて各府県の統計局へ依頼状を送り，宿舎，交通の便など現実に即した日程をつくりあげていく。統計局の協力はもとより，まだ地域社会が役所を中心として機能していたため調査の下準備に役人の助力が不可欠であった。後年，寿岳はこの探訪調査を回顧して水谷の寄与を「心からのはげまし」[27] と深く感謝している。

寿岳が全国の手漉紙のリサーチを敢行する前に書いた「手漉紙を語る」（『阪急美術』２号，1937年）という一文は，生産者，受容（消費）者に対して発した，手漉紙の停滞した現状を打破し改善していこうとするメッセージである。生活の西欧化につれて和紙の需要の範囲が縮小されていく傾向，原材料の高騰，身体的に苛酷な作業現場（紀伊の有田郡八幡村の作業場では近年まで女性が朝の４時から夜の12時まで働いていたという），こうした手漉作業の現場に立ちはだかる逆境を乗り越えるには，受容者（消費者）側の理解がもっとも必要であると訴える―「大事なのは，一般の民衆が和紙の美しさや良さに対する正しい理解と愛情とをもつことだ」[28]。現地でも生産と消費をめぐる難問が続出した―「今の世に，こんな立派な障子紙を，二尺三寸に九寸のもの十枚を一帖として，十銭で卸すなどと言う夢のような話があろうか。原価計算をしてみれば殆ど利益は出てこない。つまり労働力を計算に入れないのである」。将来はどういう風に進めばいいかと熱心に尋ねられて，文章は，「今後も絶対にパルプなどを混入せず，正直一途に古法を守ること，値段の安いのは結構だが，将来に備えて労働力も原価に加え，もう少し高く売ることを勧め，販路その他に就いては心配の必要なく，いつでも東京大阪方面へ紹介すること」[29]を約束している。

Ⅲ　『紙漉村旅日記』

1937（昭和12）年７月，帝国学士院の推薦により，有栖川記念学術奨励金をうけ，「日本に残存する手漉紙業の歴史的地理研究」をテーマとして妻静子と全国紙漉村調査旅行を開始した。その記録が『紙漉村旅日記』（図版３）で，当時の和紙文化の一面をとらえた日本におけるフィールド・ワークのはしりであった[30]。まず紙漉の現状を記録する媒体を「日記」に寿岳が求めたのは特筆に値する。寿岳は生涯，日記をつけ続けたが，それは日記のもつ記録性を信じていたゆえであった。日記記録者として模範としたのは17世紀英国の作家ジョン・イーヴリン（1620-1706）であった。潤色をまじえない客観的な記録を尊んだからである。

先行作品　『旅日記』は寿岳とその妻，静子の手によって夫婦が協力して書かれている。では夫が観察した事柄を妻がその日のうちに書き写すといった記録形態はどこから学んだのであろうか。第一にダード・ハンターの『日本，朝鮮，中国の紙漉巡礼』（1936）の影響が考えられるが，記録が精密な点においてもっと身近な文献に注目したい。1933（昭和８）年，寿岳が尊敬する言語学者，市河三喜，晴子夫妻は欧米旅行をし，その記録を書き著した。旅行記は『欧米の隅々』と題され，興味深い記述にあふれている。「期間になるたけ広く観察するために，二つの眼よりも四つの眼，ひとつの心よりも二つの心，どれもできるだけ大きく開くことを心がけ，妻同伴にて旅立った。自分は主としてベデカーその他の案内書を読んで次の日の行程，

プログラムを作り，もっとも有効に一日を費やすことを計画する。妻は宿に帰ってから，一日中に見聞した事件を細大もらさず書き記す。かくて満七ヶ月の間，日々見物に奮闘努力を続けた記録が本書である」[31] と序文にうたわれている。『紙漉村旅日記』の「序文」にも同じ言葉が繰り返えされている[32]。『旅日記』の記録的な形態は『欧米の隅々』に負うところ大であろう。

3 『紙漉村旅日記』

また『旅日記』はできるだけ客観的で科学的な記述に努めているが，そうした科学的な視点は，リサーチのオーガナイザーでもあった内閣統計局書記官であり，民芸運動の同志であった水谷良一の『労働統計論』(1938) の示唆がある。それは「労働統計の諸問題をとりあげ，最近の社会政策理論との関連において把握しようとする」[33] アプローチである。

日記　さらに『旅日記』の叙述形態をより深く考えておかねばなるまい。つまり，なぜ『旅日記』は日記というかたちでもって書かれなければならなかったのか。忠実な記録をのこすうえで，寿岳は日記という形態に信頼を寄せていた。寿岳は十代から日々おこたることなく自らの日記を綴りはじめ，「戦後は一日も廃したことがなく」，死をむかえる数日前まで書きつづけた[34]。日記文学として世評の高い永井荷風の日記『断腸亭日乗』を「これは人に見せることを意図しており，そのソフィスティケーションが鼻につき，私は嫌いだ」と否定し，「荷風文学に帽子を脱いでいる限り，日本文学の体質改善は不可能であろう」とまで批判している。それに反して『高見順日記』(全17巻) については，「明治以後の作家には，日記を残した人も多いが，圧巻は何と言っても高見順だろう。…生前，この日記の筆者と相見る機会がなかったのを私は残念に思う」[35] と高く評価している。『高見順日記』には寿岳自身が大学新聞に寄稿した一文までが引用されていて，全幅の信頼をおいている[36]。

このように日記において何よりも記録性を重視する態度は，サミュエル・ピープス (1633-1703) の日記よりも同時代のジョン・イーヴリンの日記を，「イーヴリンの方がはるかに上である」[37] と断定している。ジョン・イーヴリンの日記は1620年から1706年まで，つまりジェイムズ一世の時代からアン女王の時代までを網羅しており，英国がヨーロッパの小国を脱し，列強の帝国に加わるまでの変遷を跡づけることができる。作家であり，イギリスの林業と園芸の先駆者でもあり，たゆまぬ行動力と好奇心を抱いていたイーヴリンは自らの人生を克明に記録している。さらに王立協会設立者の一員であり，科学者ロバート・ボイル，アイザック・ニュートンと盟友でもあり，歴史資料としては何よりも黒死病の惨禍とロンドンの大火の記録者（大火発生からわずか11日後に国王へ「新しいロンドンの都市計画」を提出している）として特記されるべきであろう。

日記がもつ歴史的資料性について，寿岳のなかには「日記が文学的な価値をもつようになるのはルネサンス以後で，同時に日記は，公的に記録されていない事実を歴史家が知るための貴重な資料となった」という認識がまず前提としてあった。その上で，『イーヴリンの日記』を「文学としても史料としても第一級であろう」[38] と推挙している。ここで日記の記録性を最重要視する寿岳が日記に文学性を認めている点については矛盾しているかもしれないが，寿岳は同時に「日記は私小説と同じ線に立つ」という認識も示している。つまり，単なる事実よりもその奥にある真理こそ寿岳が求めてやまなかったものなのである。

文学性　それゆえ寿岳が日本文学にも精通したリサーチャーであったことは，『旅日記』に見られる文化観を豊かなものにし，読者の歴史感覚に強く訴えかけてくる。想像力を作動させる意味で，『旅日記』が文学作品とも読めるゆえんである。リサーチを着手する以前から，『宇津保物語』，『源氏物語』，『御堂関白日記』，『枕草子』などに見られる記述（「あつごえ」，「ふくだみ」など）によって，寿岳は奥州で抄造されていた上質の美紙である陸奥紙（みちのく），檀紙が貴族のあいだで愛用されているのを知っていた[39]。1938（昭和13）年4月27日，二本松駅に到着した寿岳は，たちどころに「西の空に安達太良山の姿が大きく聳え，万葉以来，史実や文学と結縁浅からぬ土地がら」を想起する。「安達太良山」という地の霊に触発されて寿岳のなかでは，「陸奥（みちのく）の，安達太良真弓（あだたらまゆみ），弦（つら）はけて，引（ひ）かばか人の，我（わ）を言（こと）なさむ」という万葉集の一句がよみがえってきたはずである。現に『旅日記』にある「『相生集』の著者は「是乃当国所出檀紙，古往称乃陸奥紙，今俗日乃引合者是也」とある『聞老志』の文を引き，当村をも陸奥紙抄造の一候補地としている。（ともあれ阿武隈川の沿岸に今もなお紙漉地の多いことは，「みちの

くの安達太良真弓」などの言葉とともに，陸奥紙を考証する上の有力なてがかりとなるであろう。)」[40] という記述からうかがえるのである。

八尾村への探訪　晩年，寿岳はあまた訪れた紙漉村のなかでも富山県八尾（やつお）村への探訪をもっとも印象深いものとみなしていた。それは1939（昭和14）年12月27日のことであった。『旅日記』の記述を追体験することで，寿岳が和紙に何を求め，いかなる評価を下していたのか，明らかになるであろう。

「雪に埋もれて紙漉く村は野積四谷（よたん）に五箇五谷」，かつて越中おわら節にそう歌われた八尾・野積の「四つの谷」（野積，室牧，仁歩，大長谷の旧四村）は，全国屈指の和紙の産地だった。昭和十年前後までは「野積千軒紙漉かざる家なし」とまで言われ，そのたぐいまれな紙質を誇っていた。もっとも，当時，この地方の紙漉き人たちは，自分たちが生み出している紙の真価を十分に自覚していたわけではない。和紙はそのころ傘紙，障子紙などの日常品であり，村人にとっては，その美を全国で漉かれている紙との比較で論じる対象とはなりえなえていなかった。

『旅日記』によれば，富山駅で寿岳は友人で木工家の安川慶一と待ち合わせた。安川は寿岳と民芸運動の仲間で紙漉村まで同行することになる。列車はすぐに八尾に到着し，「急勾配の坂道」を30分ほどかけて村に入り，紙漉師，谷井秀峰のもとを訪れ，資料を借覧し，地元の和紙に関する数々のことを質している。谷井が漉いた紙を見て，寿岳は「草木染などは，どんなに立派なのでもこの谷なら出来ると思う」と高評価を下している。寿岳は愛用の二眼レフのカメラを風呂敷につつみ持参していたが，谷井は風呂敷の模様まで記憶にのこるほど寿岳の訪問は忘れ難いものであったと後に述懐している[41]。

やがて寿岳と安川は「家造りの美しい村」である高熊村に入っていくと，「耳の遠い爺さん」が漉いたばかりの「赤相竹」の裏を板につけ，家の中では「婆さん」がその表を漉いていたのであった。この村の特産である紅柄紙は，表と裏を貼り合わせるから「裏表（うらおもて）」とも呼称されている。寿岳はこの「赤相竹」をことのほか愛し，自宅の壁紙に用いている。「叩いた楮を船に入れて立て，紅がらをさし，…横に三枚取の箕で相竹判を漉く。その漉き方を見るに，よほど溜め漉が加味されている。水切りは大砥石を三つか四つのせて重しとする原始的な造り方。松の干し板に，手作りのスベの刷毛でどんどん貼りつけてゆく」[42] と寿岳は詳細に紙漉きの過程を観察している。1947（昭和22）年，京都の西村書店から出版された竹友藻風訳のオマール・カイヤム『ルバイヤット』を寿岳は装幀したが，表紙には赤相竹を使用しペルシアの詩想をかもしだしている。また本高熊は寿岳にもっとも愛された手漉紙で，『旅日記』普及版（昭和20年）の本文用紙にも使用されている。

杉原紙の復興　さて，寿岳は紙漉く人々に精神的な支柱となっただけではない。長く絶えていた杉原紙を復興させ，地域住民に生活の資をもたらすことにも寄与したのである。たしかに寿岳は，研究活動を机上のうえだけで終始している傍観者でしかない研究者とは一線を画した存在であった。播磨の可多町での杉原紙復興は村落の経済的な自立だけではなく研究所の設立までともない，和紙復興の理想的な姿を示唆するところとなったのである。播磨地方には奈良時代から抄紙技術があったが，杉原紙の名前は12世紀初頭（永久４年）から文献にはあらわれ，平安から鎌倉時代にかけて全国で類似した紙が漉かれ良質な和紙の代名詞とまでなっていた。ところが明治時代に機械漉の西洋紙が移入されると，たちまち杉原紙は姿を消し，杉原谷村においても大正期に果ててしまったのである。

4　宇原弥之助

文献の精査，加えて現地調査から寿岳は杉原紙の原産地が杉原谷であることを同定した。新村出とともに現地に赴いた寿岳はまだ生きていた紙漉職人，宇原弥之助（1890［明治23］年生れ）の証言に耳を傾け，この古老の「一語も聞きもらすまい」との想いが心をしめた。やがて「私はかつて紙草をさらしたという谷川に下り立った」とき，それは確信となったのである。

そして1970（昭和45）年11月20日，ほぼ50年ぶりにその老紙漉職人は試作（コウゾ100パーセント，ソーダ灰［あく抜き］，ノリウツギ［ねり］）をしたのだが，「茶碗一杯ぐらいの原料だんな。30枚ぐらいすいたよ。できたときは，そりゃあ，うれしごわしたがな」と笑顔をうかべた。この試作する姿は『加美町広報』の表紙に再現されている。（図版４）ちなみにこの『広報』自体も杉原紙に印刷されている[43]。

実作と並行して杉原紙の研究も着手された。幼少の頃，真新しい杉原紙を干す風景をまぶたに焼きつけていた杉原谷小学校教諭，藤田貞雄（1907-92）は，寿岳の論考に導かれ杉原紙研究に一身を捧げた。研究書

『杉原紙―播磨の紙の歴史』（1970）が出版されたとき，強度の近眼で白内障をわずらっていた藤田は「もうこれで死んでもいいと思った」と述懐している。この堅実な論考には寿岳の「杉原谷紀行」（初出『和紙研究』第７号）も抄録され，その付記として調査にきた若き日の寿岳の姿がとどめられている。「まだ還暦に達しられていない，高雅端麗，しかも気品と温容を兼ねそなえられた，新村先生に寄り添うように気を配りながらも，エネルギッシュに資料を探索し収集される，若い日の寿岳先生の，ご熱心な学究的態度，そうした美しい情景が，その後三十年経った今もなお，わたしのまぶたにまざまざとうつる」[44] と寿岳の姿を語っている。

やがて紙漉業の先駆者である綾部市黒谷や福井県今立町の協力をえて，1972（昭和47）年，研究と実践を兼ねた「杉原紙研究所」が設立されたのであった。一戸一株運動というスローガンのもと，町をあげて楮栽培の促進をめざした。やがて明治年間の古文書に挟まれていたという「かみ（紙）がうすうても杉原がみは，しわもよらずにしゃんとしてござる/紙をすきすきすき出すうちに，紙ににたよなしらが（白髪）がふえた」という杉原谷に伝わる「紙すきうた」もよみがえったのである。このように全国にわたる紙漉村の探訪を完遂した1940（昭和15）年に杉原谷における紙漉調査もなされた意義は大きい。よって「杉原谷紀行」を『紙漉村旅日記』の一節として読んでもなんら支障はないのである。

日本回帰の書　『旅日記』を狭義な意味で和紙研究の書とみなしてはならない。その背後にひかえている著者の姿勢を見逃してはならないからである。日中戦争の戦禍が深まってくる時期に寿岳が和紙研究に着手した事実は改めて注目すべきであろう。寿岳のなかでは祖国日本の姿を明確に認識しておきたい衝動が生じていた。その確認作業の手掛かりとなったのが和紙であった。学士院に提出した調査報告書のなかで注意しているように，「純粋に日本的な性格をもっている和紙」が，わが民族と長きにわたり交わり，世界無比の優秀な品質をもつにもかかわらず，「起原，発達，変遷，現状など」にともなう諸問題の「学術的究明」が等閑視されてきた，という欠落を指摘している。ある意味で寿岳の和紙研究は「日本的なるもの」を追究する試みほかならなかった[45]。

1938（昭和13）年４月18日，福島県の入遠野村と上遠野の紙漉村を訪れたとき，寿岳は「漉き方，昔はユリドメであったが，今はクミナゲばかり。ゆりどめ，くみなげの二語，溜め漉，流し漉にもまさる優雅で含蓄の多い言葉だと思う」[46] といった感慨を吐露しているが，寿岳の胸のうちには，「農民の暮らしの知恵が，このたくみな表現を生みだしたのだ」という確信があり，「現地へ行ってみなかったら，おそらく私たちはこの方言を知らずに終ったことだろう」[47] と改めてリサーチを敢行した意義を見出したのであった。

寿岳にとって日本固有の流漉の発見は，日本文化の独自性へとつながっていった。流漉を解説する文脈のなかで，日本文化の特異性がさらに強く打ち出されていく。たとえば，ネリについて，繊維を含まない粘汁の粘着剤は，繊維にほどよいからまりを与えるだけでいささかも自己主張しない。こうした粘着剤こそ流漉を可能にさせるもので，「流漉の特色，美点であり，**わが和紙文化をつらぬく太い一線**」[48] である，と寿岳は指摘する。そして流漉は日本文化そのものと合致していくのであった。「**ひとりわが国**は，溜漉とともに流漉をもち，わが国人の天性の器用さと相まって，薄いものでも厚いものでも，横目のでも縦目のでも，どんな紙でも自由自在に漉きこなすようになり，はやくも平安時代にあの優婉な和紙工芸文化を招来したのである」[49] と。寿岳は「和紙への認識や理解はもっともっと深められねばならない。和紙を知り，和紙を愛することは，やがて**日本を知り，日本を愛すること**にほかならぬのである」[50] と語り，まさに和紙は祖国愛を表象した対象であった。（太字の強調は筆者による）

よって探訪調査の前に語られている言葉は印象的である。「一年の歳月は萌え出づる草木の色をこそ変えね，想像だに及ばなかった地位へ我々の祖国日本を置きました。感慨実に無量。が然し，真に正しい道義をもつ政治のみが，より永い世代に生命を保ち得るという厳粛な歴史の理法を疑わず，各々の職責を果す以外，どこに我々の生きる道がありましょう」[51]（昭和13年１月17日）とあるように，これが戦時を生きる寿岳の覚悟となっていく。

迫りくる戦禍　寿岳夫妻が紙漉農家を訪ねるため役所に問い合わせに行くと，「何をのんきな，というような目で村役場のひとたちからは見られた」という。また軍事施設があるのを知らなかった地方では「夜中，特高の訪問を受け」，また何軒かの紙漉く家には戦死者を示す「贅の家」という紙切れが何枚もはってあり，「胸ひきしぼられる思い」が迫ってきた[52]。

晩年の寿岳は「昭和十五年代初頭の和紙抄造の姿を忠実に録した私たちの旅日記は，よしささやかにもせよ，文化史的な意義を持つ，と自負し得ないであろう

か」と吐露しているが，『旅日記』には戦禍が暗雲のように垂れ込めている。たとえば1938（昭和13）年４月16日から30日まで東北に紙漉の調査をしているが，日本はほぼ４ヶ月前，南京を占領し大虐殺事件を起こし，寿岳が東北を歩いていた同時期に国家総動員法が公布され，そして半年後には武漢三鎮（ぶかんさんちん）を占領した。着実に軍靴の音は高まっていったのである。

回顧　亡くなる数年前，寿岳は自らの『旅日記』を文化の衰亡をとらえた記録として評価していた。「天平の昔から，日本文化の精華であり続けた和紙が，いま私たちの目の前で滅亡しかけている。ならば，この足で歩き，この眼で見，その日のうちに書き綴ったこの旅日記を，ユニークな実録として残しておくだけの価値はあろう」[53] と和紙の白鳥の歌を自ら汲み取ろうとした。

寿岳がもっとも好んだ和紙は，富山県の八尾町奥にある野積谷で漉かれた紙であった。薬の包装紙，行商人が用いる薬売りの袋にその紙は用いられていた。だが製薬業の洋風化にともない和紙を用いた伝統はついえたであろうと寿岳はあきらめの境地になった。「にもかかわらず私は行きたいのである。一軒でもよい，亡霊でもよい，昔からの手法で，楮の白皮を雪にさらす風景に出会えたら，私は満足する。だが私はすでに老いた。行ってみたいと思うばかりで，身をおこすことはむつかしかろう」[54] という嘆きのなかに，かつて探訪した紙漉村の情景が鮮明によみがえっていた。

結びにかえて―『和紙歴史事典』の構想

寿岳の紙漉村への旅は戦後になっても終っていなかった。戦争の影響がどのようなかたちで紙漉村に影を落としているか，寿岳はつぶさに調べたかったのである。ただ時間と経費の制約から，また多忙をきわめていた寿岳は現地に赴くことができず，焦燥感がつのるばかりであった。そこで主要な紙漉村へ「手紙で連絡をとり，戦後の実況を知らせてもらう」という手段に訴えるところとなった。

山形県新庄町の長澤村は，寿岳夫妻が訪ねた全国の紙漉き村のなかでもっとも「篤実な農村の性格を具えていた」という。その村の，当時，幼い小学生であったが今では立派な若者になっている叶内好雄から新しい世代を伝える声が寿岳のもとへ届いたのである。

> …終戦を告げて四年目，農村の好況時代はすぎ去り，やっとこの頃村人たちは，抄紙の重要さを認めだし，原木増産の意欲も幾分か見えてまいりました。しかし悪化した食糧事情に禍されて，父［＝同村製紙組合長］の努力にもかかわらず。実績は良好でありません。よし，それでは人にすすめる前に自分からと，今春山畠に三反歩ほど植えました。田畠の少ない土地だから紙すきに励まねばならぬとすすめる父に同意し，私は一昨年家の裏にピーター一台，乾燥機一台をすえ，十五坪足らずの紙屋をたてました。私は次男ですが，愛郷長澤の恐慌の渦中から救うために郷里に居残り，長澤独特の生紙の発展に専心いたす覚悟であります[55]。

この青年は「三四年後の長澤生紙の進歩を見ていただけるよう努力し，たのしみにして待っております」と手紙を閉じているが，寿岳は戦後の和紙復興に寄与する精神的な支柱となっていたのである。

黙示録的な予言　1973（昭和48）年，毎日新聞社が『手漉和紙大鑑』（全五巻）を出版するに当たり，全国の手漉和紙の実情を調べると，日清戦争（1894-95年）のころ63,000戸あった生産家は，1949（昭和24）年には9,000戸になり，現在（1973年）では850戸に激減してしまっていた，という実情に寿岳は愕然とした。そして５年後は500戸を割るだろうという黙示録的な予言すらたてる。寿岳が紙漉の実態を調査するため全国をまわっていた頃，「まだ過去の栄光の照り返しを豊かに残し，不便な山奥の農家で，ほれぼれするような紙の漉き立てにめぐりあうことができた」幸福を寿岳はしみじみと述懐している[56]。しかし，自然環境の破壊にともない自然に依存する紙漉業は荒廃の一路をたどる運命にあると寿岳は悲嘆するのだが，文化財の修理，数奇屋建築などにおいて需要がある限り，手漉紙は細々と命脈を保っていくであろうと一縷の希望を託すのである。そうした寿岳の胸中にはハンターと交わした昔の対話がよみがえってきた。ただ同然で買える手漉紙を鼻紙にまで使い捨てる日本人は世界一贅沢な民族だと皮肉るハンターに対して，知人の製紙家から無代で手隙紙をもらっていた寿岳は，全く関係のない他国の話としか聞こえなかった。ところが寿岳が愛用し使い捨ていた山口県の徳地漉紙は，10年前に一枚が40銭となり，この春には５円となった。来年には確実に10円になるという。これでは買う人もなく売れないと作る必要もなくなってしまう。こうした悪循環から手漉和紙は姿を消していくのである。最後に「民族の生命と文化のあるかぎり，漉かれ続けよ」[57] と寿岳は自らの祈りを発している。

紙漉く人々への支援　紙漉の実態をつぶさに知った寿岳は紙を漉く農民の支援者として，社会の激動，経済の悪化などに直面したとき，失意におちている紙漉く人々を鼓舞し，励ます文章を幾度となく書きつづった。終戦直後，「日本は戦争に敗れ，日本人の心まで変えた。しかし和紙の美しさは昔とすこしも変りはない」[58] と新聞に寄稿した寿岳の言葉にどれほど紙漉く人々は慰撫されたであろうか。同じ時期に発表されたエッセイ「紙と文化」のなかには，和紙を日本から解放し，世界的視座から紙の精髄を追究しようとする深い先見性に満ちた言葉があふれている―「一番大きな夢は世界の和紙を作り上げたい念願である。和紙といえば人はすぐあの『コウゾ』や『ミツマタ』や『ガンピ』でつくった手漉の紙を思うだろう。なるほどそれはもっとも和紙らしい和紙である。しかし和紙は日本以外の国々で漉かれる紙に対しての和紙であって，手漉と機械漉の区別をするものではない。機械が手の発展であり延長である以上，いつかは機械が手の役割の大部分をひきうける時がくるであろう。私はむしろ各種の和紙にあらわれてきたエトスを手であれ機械であれ，もっともあざやかに生かす工夫と努力とを積むことによって，世界のどこにも比類のないゆたかな内容をもつ製紙国にしたいのである。それはやがて文化国として生きる日本の姿ともいえるのではないか」[59] と紙と文化を接続するのである。

『和紙歴史事典』　杉原紙の件で取材を受けた寿岳は71歳になっていたが，「年をとってしまったが，きばってやっとります。これから三年ほどかけて和紙歴史事典を仕上げます。日本の紙が滅びないよう，お互いに力を合せなければねぇ」[60] と熱のこもった言葉を伝えている。『事典』の準備は早くも戦前から着手されていた。寿岳は和紙関係の文献記事を渉猟するため，恩師，折村出を介して，京都大学の国史，農政，経済の各研究室への紹介の労を願っている（折村出宛，寿岳書簡，1938年９月11日）。事典は着手されてかなり準備がすすんでいたのだが，ダンテ『神曲』翻訳の仕事が介入してきて，事典は後回しとなり翻訳が完了してから編纂されるところとなった。

寿岳を理解するうえでこの未完の事典は重要である。ブレイクに次いで，モダニスト詩人Ｔ・Ｓ・エリオット（1888-1965）は寿岳が愛唱してやまない詩人であり，とりわけその詩集『荒地』（1922）は寿岳に深い影響を及ぼし，「私自身のものの見方も考え方も，つねにこの詩の大きな投影のもとにあったことを強く感じる」と晩年になって認めているほどだ。「四月はもっとも惨酷な月である」と季節の倒錯から語りはじめる『荒地』は，現代の黙示録を示唆する詩でもある。第二次世界大戦後の「現在」，地球上のあらゆる地域に，エリオットのいう「荒地化」が認められると寿岳は危惧していた。寿岳のいう荒地化とは，「物心のふたつにわたり，伝統的な文化遺産が破壊され，それに代わる価値ある文化の創造されない状態」[61] であったのである。まさに紙漉業は荒地のなかにあった。

上述したように，寿岳夫妻は日中戦争が始まった1937（昭和12）年10月から1940（昭和15）年３月まで紙を漉く全国の村々へ旅し，製紙の実態調査と，その歴史的な跡づけを主目的とするリサーチを敢行した。その時，1894（明治27）年に63,000を数えていた紙漉戸数は，すでに三分の一以下に減少していたのである。現地ですばらしい紙に接した寿岳の心はいつも躍ったという。それは「退廃していない伝統の力のたくましさとたのもしさに打たれた」からであった。だが，能率万能主義と戦後の高度経済成長政策の犠牲になったのが，和紙産業であった。「エリオットの荒地的観点に立てば，精神にも自然にもかつて知らぬほどはなはだしい荒地と貧困をもたらしたのが，こうした政策である」と寿岳は厳しく指弾してやまない。和紙産業は進歩という美名のもと「いやしがたい損傷」を被り，製産戸数は800戸を割ろうとしていたのである。「伝統の栄誉に値する和紙の抄造は，私の目の黒いうちに滅びてしまうのではないか」[62] という焦燥が寿岳をおそった。

紙漉場を現地リサーチした反省から，寿岳は「和紙事典」を構想する。それは経済成長という虚像に魅せられている人々に対して，「何がもっとも人間的なのかを悟」らせ，「価値ある伝統のよみがえる日もいつか来よう」という希望を託した事業であった。『和紙事典』は寿岳が「十数年来書きとめてきた資料を整理し，技術・歴史・伝承など，和紙についてのすべてを一冊にまとめておきたい」と企画したものであり，それは寿岳自身の白鳥の歌となるべき仕事であった。「和紙に愛着する私の，和紙に関する著述の最後であり，またおそらくは，私がこの世にのこす最後の仕事となろう」[63] と1974（昭和49）年，病室でダンテの『神曲』を翻訳しながらつぶやいたが，寿岳の死によって『和紙事典』は完成することはなかった。項目別に記入された膨大な量のカードが遺されており[64]，そこに刻まれた知見から寿岳の和紙に対する深い愛情を感じとることができる。

芸術家の未完に終った遺作が芸術家自身と全作品を

より雄弁に総括しているのと同じように，寿岳が編纂しようとした和紙の事典は未完成であるがゆえに，読者を参画させ，自由に読まれるのを待っているのではあるまいか。よって，この未完の書は，永遠に「開かれた」作品となり，かつまた寿岳の全作品の「索引」とも読むことができ，和紙の人，寿岳を知るうえで最良の文献のひとつになるのであろう。記録されたカードをデーター化される日が待ち望まれる。

本論の冒頭でふれた学門分野にこだわらず横断していく寿岳の知の在り方がより明らかになってくる。「私は紙の研究だけを専門とする者ではないのだ。英文学へも書誌学へも情熱をささげてきたし，今もささげている。また行動よりも存在を，ある意味では重要と思う私にとって，どうあるか，どう生きるかの問題は，いつも念頭をはなれない。文学，美術，工芸，これらすべての問題とからみあって，私の生活内容となる。社会協同体の一員であってみれば政治や経済への強い関心なしにその日その日はすごせないし，世の中をみにくくする事件がおこればむしょうに腹も立つ。ことに宗教的真理へのあこがれは，日ましにはげしくなってゆく。私は生まれつき欲が深いのであろうか。ひそかに反省して，自分でうれしく思うのは，私の場合，あらゆる情熱，思慕，研究が決して孤立してはおらず，密接につながり，全人的に私を推進してくれることだ。ことし一年も紙を科学することに私のエネルギーは少なからず費やされるだろうが，その消費は，私を生かす重要な燃料だと思っている」[65] と語るなかに，寿岳の超人的な活動の原動力となる正体を見出すことができるのである。

寿岳の超人的な探究心は，人間としていかに生きていくかという自らの葛藤そのものから発している。そこで最後に注意しておかねばならないのは，寿岳が和紙研究の対象を和紙のみに限定していないことである。寿岳には「どのように生きるか」という問題がたえず念頭にあり，「文学，美術，工芸すべてがからみあって」寿岳の生活は成立っていた。そうした生活を推進させたのは「宗教的真理」への探究であった[66]。1992（平成４）年１月16日，寿岳文章は91歳の生涯を終えた。寿岳の全業績を精査，分析して全体像を把握，統合する試みはごく最近始まったばかりであるが，今回のシンポジウムはその大きな第一歩となるであろう。

注

1）主催は「寿岳文章と仕事展」実行委員会と向日市であり，共催は特定非営利活動法人「向日庵」である。また文化庁，令和３年度文化芸術創造拠点形成事業であり，会場はWEB会議システム上と向日市文化資料館研修室におかれた。

2）寿岳文章「和紙と私」，「ダンテとブレイク」『わが日わが歩み』（荒竹出版，昭和52年），p. 372, p. 72.

3）Ronald B. McKerrow, *An Introduction to Bibliography for Literary Students*（Oxford University Press, 1927），pp. 97-99.

4）*Ibid.*, pp. 101-102.

5）「学問以上 和紙が見せる日本人の良さ」『関西学院大学新聞』

6）杉原紙研究所編『寿岳文章の集めた和紙―『紙漉村旅日記』から―』（兵庫県多可郡多可町，2016）。寿岳文章 人と仕事展 実行委員会編図録『寿岳文章 人と仕事展』（向日市文化資料館，2021），pp. 30-39.

7）「文献伝達の途上に出現する一切の事象に対し，厳密周到な用意のもとに，極めて客観的科学的な究明を試みるものであるが，私は約二十年以前，博士がシェイクスピアの本文校勘に当たって，それとは一見無関係をと思われる当時の印刷機構の細部―たとえば印刷工の労働条件のような―をも忽にせず，これを闡明することによって，本文批評にぬきさしならぬ実証を与えている精緻な学風に心惹かれ，わが国の文献研究に於ても，写字，印刷，用紙，装幀，出版等に関する精密な考究が不可欠であるべき事実に想い到り，その一区分として，まづ和紙を対象にささやかな研究を続けていた。」寿岳文章「手漉和紙の歴史地理的研究序説」『帝国学士院紀事』（第１巻・第３号，昭和17［1942］年11月），p. 435.

8）寿岳文章「書誌学と私―マケロウ博士の思い出」『関西学院新聞」（昭和26年６月25日）

9）手紙はThe Biographical Societyの用箋に手書きで認められている。向日庵資料（向日市文化資料館）

10）寿岳文章「書誌学と私―マケロウ博士の思い出」

11）甲南女子大学図書館に設置された「寿岳文庫」には英語で記入された当該の文献が収蔵されている。

12）寿岳文章「本との出会い 英国書誌学会の会員に」『毎日新聞』（1973年１月15日）

13）寿岳文章は自らの和紙発見と民芸運動が同時発生的であると認めている。「つまり紙と西洋の手漉紙を通して，逆に振り返って和紙の貴重さを認識し直した。その時期が柳さんが民芸運動をスケールの大きな立場でやったときと軌を一にしている。」寿岳文章・章子『父と娘の歳月』（人文書院，1988），p. 177.

14）寿岳文章「美について語る」『平日抄』（靖文社，昭和22年），p. 28. 初出は「美についての一つの法話」という題で『工藝』94号［1939年３月１日］に発表された。

15）寿岳文章「美について語る」，p. 30.　寿岳は美に内在する意味の振幅を以下のように考えていた。「『うつくし』とか『いつくし』とか言う私どもの言葉をしらべてみますと，慈愛を意味する『いつくしび』や，荘厳や清浄を意味する『いつき』などと密接なつながりを持っており，英語のbeautyをしらべてみますと，善とか至福とか清寧とかを意味する羅甸語のbonus

から来ており，更にその bonus は，尊敬や名誉を意味するサンスクリットの dúvas と関係があると言われています。つまり不純なもの，汚穢なもの，惨鼻なもの，低劣なもの，不徳なもの，病的なもの，破廉恥なもの，冷たいもの，騒がしいもの，濁ったもの，我意の強いものは，それぞれ美の内容となることができぬのを，人類はその遠い長い歴史に於いて体験してきたのです。『うつくし』と言う国語の主要概念をなす『神聖さ』を意味する英語の holy が，whole（健全な），hale（強健），heal（癒す），health（健康）などの諸語と同一語源であり，しかもそれが，『完全』を意味するヘブライ語の shālōm と血族関係をもつことは，神聖なものと健全なものとの二而不二を示して，甚だ興味があります。冷たくってはいけないし，我意があってはいけない。そこから，調和や秩序が美の大きな特性であることがおわかりでしょう。病的であってはいけない。そこから，材料の良さが美の大きな約束となることがおわかりでしょう。数ある美の性質のなかから，この二つだけを採ってみても，物が美しいか美しくないかの批判の練習になるでしょう。」，*Ibid*, pp. 28-29.

16）Malcolm Yorke, *Eric Gill : Man of Flesh and Spirit*（Constable, 1981）, pp. 68-69.

17）寿岳文章「東洋美学の草の根」『会報』第91号［古美術研究会創立15周年記念講演会］（甲南大学古美術研究会，1967），pp. 4-12. 寿岳は思想を肉体化していく必要性を柳宗悦を例にあげ，以下のように説明している。「柳宗悦の二本柱はものを見る確かな鑑賞眼，それはものを集め，美しいものを美術館とか博物館とかいった組織のもとで，いつでも人に見てもらうことができるという実行行為の面と，何よりも大切なことは思想だと思う。つまり思想は，言葉は反対のように思われるけど，ものがあってこのものを肉体化することができる，どんなに時代がすぎても思想そのものが生きているかぎりは，肉体化しているかぎりは時代々々に応じてそれに合致する思想が生産されるし収集されるといった，この二つの面での柳宗悦はたえず二頭立ての馬車を駆って車を進めていた。」『父と娘の歳月』，p. 165.

18）寿岳文章「ダード・ハンターとの一日」『書物之道』（書物展望社，昭和 9 年）」，p. 118.

19）寿岳文章「和紙にひかれる外人」

20）「ダード・ハンターとの一日」，pp. 122-23.

21）「私版だより抄」『紙障子』（靖文社，昭和22年），pp. 286-87.

22）『高松宮日記』第 2 巻，（中央公論社，1995年），p. 463. 最初，この栄誉を聞いた寿岳は日記に，「学術振興会から年額千円乃至千三百円を得，三年がかりで日本の紙漉をしらべてみないかとの話あり。夢かと思う」（1936年 4 月18日）と，歓びをしるしている。

23）寿岳文章「手漉和紙の歴史地理的研究序説」，pp. 435-55.

24）*Ibid.*, p. 436.

25）*Ibid.* 柳宗悦「和紙十年」『柳宗悦民藝紀行』（岩波文庫，1986），p. 135.

26）寿岳文章「あとがき」『紙漉村旅日記定版』，p. 420.

27）寿岳文章「紙漉村旅日記回想」（『民芸手帖』第20号 1960年 1 月，p. 9.

28）「手漉紙を語る」『阪急美術』第 2 号（1937年11月）.

29）寿岳文章『紙漉村旅日記』，pp. 162-65.

30）宮本常一『旅の発見―日本文化を考える―』（社会思想社，昭和44年），pp. 168-71.

31）市河三喜，晴子『欧米の隅々』（研究社，昭和 9 年），p. 3.

32）「いづれにしても，あとから思い出して書くと言うのでは，誤りも生じ易く，億劫にもなるので，私どもはその場その場で日記を整理する方針を立てた。そのために，朝は五時前に起きていながら，夜は十二時を過ぎてなお日記の筆を執ると言うようなことも少なくなかった。」寿岳文章「まえがき」『紙漉村旅日記』（向日庵，昭和18年）.

33）水谷良一『労働統計論』（東洋出版社，1938），p. 3.

34）寿岳が書き続けていた日記（1992年）には「この日より就床」（1 月12日）と娘，章子が記入している。（向日庵資料，向日市文化資料館）

35）寿岳文章「日記」『越後タイムズ』（昭和43年 1 月21日）

36）「昭和のはじめ頃から末端ながら思想運動に関係していた私は，検挙されるとかならず食う，家宅捜査にそなえて，日記はつけないようにしていた。つけられないのだ。累を他に及ぼすおそれから，つけてはならないのだ。その習慣がながく身についていた。ここらで，もう安心と書き出したわけか。それにしては，本音を吐いている部分と，まだ吐露されてない部分とがある。糖衣錠の糖衣めいた部分は読者も気がつくだろう。それでは日記を書いてもつまらないと思われるが，自分のための資料を残しておく気持ちだったようだ。」高見順「序」『高見順日記』第 1 巻（勁草書房，1965年）

37）寿岳文章「日記」『越後タイムス』（1968年 1 月21日）

38）*Ibid.*

39）寿岳文章「手漉和紙の歴史地理的研究序説」，p. 438.

40）寿岳文章『紙漉村旅日記』p. 177. 寿岳はみちのくの紙が檀紙だけに限定されるものでないことも理解していた。「世の中の腹立たしうむつかしう，片時もあるべき心地しない折ですら，白う清らなる紙，白き色紙，みちのく紙などを得れば，もうそれで心が晴れる」（『枕草子』）「当時のみちのく紙が，相当変化に富んだ紙であったことが推しはかられる」（「枕草子に見えている紙」『紙障子』［靖文社，昭和22年］，p. 103.

41）「とやま文学歳時記」第46回（『紙漉村旅日記』）『北日本新聞』（1983年12月21日）。

42）寿岳文章『紙漉村旅日記』，p. 310.

43）『加美町広報』（第190号，昭和46年 1 月号）

44）藤田貞雄『杉原紙―播磨の紙の歴史』（神戸新聞社，昭和45年）pp. 245-56. 新村出「杉原紙源流考」『新村出全集』第 9 巻をも参照のこと。

45）寿岳文章「手漉和紙の歴史地理的研究序説」，pp. 435-36.
46）寿岳文章『紙漉村旅日記』，p. 131.
47）寿岳文章『紙漉村旅日記』，p. 420.
48）寿岳文章「手漉和紙の歴史地理的研究序説」，p. 453.
49）*Ibid.*, pp. 453-54.（強調は筆者による）。
50）「和紙と装幀」『紙障子』（靖文社，昭和22年），p. 200.
51）「向日庵消息」『紙障子』（靖文社，昭和22年），p. 350.
52）寿岳文章『紙漉村旅日記』，pp. 162-65.
53）寿岳文章『紙漉村旅日記』，p. 422.
54）寿岳文章「紙漉村旅日記回想」，p. 9.
55）寿岳文章「和紙すく婦人たち―紙の村を訪ねて」『婦人朝日』朝日新聞社，第33号［昭和23年10月号］，p. 25.
56）*Ibid.* 寿岳によれば，「明治・大正・昭和の三時代を通じての和紙の歩みは，衰退へと追いつめられていく衰史であり，ことに太平洋戦争後，池田内閣によって口火をきられ，猪突猛進を続けた高度経済成長政策は，致命的な打撃を和紙抄造に与えた」（寿岳文章「紙と和紙の歴史」『手漉和紙』［毎日新聞社，昭和50年］，p. 25.）という。
57）寿岳文章「和紙の将来」『和紙落葉抄』（湯川書房，昭和51年），p. 251.
58）寿岳文章「紙と文化」『読売ウィクリー』（昭和23年５月10日）
59）*Ibid.*
60）「文学に登場した播磨の昨今―寿岳文章『杉原谷紀行』」（『朝日新聞』（昭和46年10月24日））.
61）寿岳文章「和紙歴史事典の構想」『和紙落葉抄』，p. 254.
62）寿岳文章「和紙の将来」『和紙落葉抄』，p. 347.
63）寿岳文章「和紙歴史事典の構想」，p. 257. 寿岳のなかで和紙を歴史的観点から検討する視点は，『出版事典』（出版ニュース社，1971）に数多く自らが書いた和紙項目にも見出すことができる。たとえば，「漉返し」と立項され，「反故紙などを水に煮とかして再び漉き直すこと，またその紙。奈良時代から行なわれていたことは，正倉院の用紙によって立証できる。多量につくるようになったのは平安朝末期，経済機構のゆるんだ紙屋院においてであり，その伝統は西洞院紙に引継がれた。死者の面影をしのばせる手紙の類を漉返させ，これに法華経や阿弥陀経などを書写して冥福を祈るという宗教的情緒の浸透も漉返し流行の大きな原因となったであろう」（p. 230）と歴史的な記述がなされている。
64）向日庵資料，向日市文化資料館。たとえば『寿岳日記』に「黒田さんの研究室へ至り，静子を待ち合わせて午前中阿波及び肥後の和紙文献をうつす」（1939年７月18日）とあるように，農政研究室の黒田教授のもとで文献筆写をしている。
65）寿岳文章「和紙を科学する仕事」『読売新聞』（1965年１月９日）
66）中島俊郎「宗教的真理の探究」『向日庵』第４号（NPO 向日庵，2021），pp. 31-55.